

ペイン・ガボシュキン夫人を悼む

古 畑 正 秋*

クリスマスも近づいた年末、ガボシュキン家からセシリア夫人が 12 月 7 日に亡くなった由の通知を受けて、やはりだめだったのかと残念であった。そのつい少し前に、来年こそは元気になって活動して下さいとカードを出したばかりであったが、行き違いになってしまった。

夫人は 1900 年の生れであるから、いま少しで 80 才という高齢ではあった。英國に生れ、ケンブリッジ大学を 1923 年に了え、それからアメリカに渡って、ハーバードの兄妹校であるラドクリフ女子大学で 1925 年に学位を得ている。それからラドクリフ、ハーバードで講師などを勤めたりしながら、長くハーバード大学天文台で研究を続けた。1956 年には教授となり、終生同天文台で過ごしている。その間 1934 年にロシヤ生れで当時ハーバード天文台に来ていたセルゲイ・ガボシュキンと結婚して、おしどり天文学者として目立つ存在となっていた。ガボシュキン夫妻については本誌 52 卷 (1959) 10 月号にかなり詳しく書いたが、もうだいぶ古いことでもあるので、多少重複するが改めて書いてみよう。

ペイン女史はラドクリフ大学で当時の新分野であった恒星のスペクトルの勉強をして、学位論文は “Steller Atmospheres” (ハーバード天文台モノグラフ No. 1) として出版されている。天文台に入ってからは恒星のスペクトル、写真光度の測定に精力的に働き、1930 年には “The Stars of High Luminosity” (前記モノグラフ No. 3) を出版している。その後は変光星・新星の研究にうちこんで多くの論文を出しているが、1938 年には夫婦共著で “Variable Stars” (前記モノグラフ No. 5) を出版している。これは特別の基金を得てハーバード天文台の有名なパトロール乾板を大学院生など大勢の人を使って調査した結果を多分にとり入れてあって、各種の変光星を詳細に記述してある大変便利な本である。惜しいことにすでに日米関係が悪化したころで、日本にはあまり入ってこなかっただようである。戦後 1952 年にロンドン大学へ招かれて特別講演をしたもののが “Variable Stars and Galactic Structure” として同大学から出版されている。変光星と銀河構造に関する広範な知識をまとめたものである。この少し前ごろボストンで行った通俗講演をまとめて “Stars in the Making” を 1952 年に出版している。これは大変面白い本で、その内容は本誌 46 卷 (1953), 8 月および 9 月号に宮本正太郎氏が紹介している。



次いで 1957 年には力作 “The Galactic Novae” がアムステルダムから出版されている。新星に関する専門百科辞典のような本で、まことに有意義な著作である。そして昨 1979 年にはハーバード大学より “Stars and Clusters” が出版された。これもやはり女史の該博な知識を盛ったもので感服のほかはない。これが最後を飾る遺著となってしまった。“The Galactic Novae” の序文にも書いてあるように、これを基にして研究者が何物かを引出して将来の発展に寄与してほしいというのが女史の念願であった。いかにも女性学者らしい心づかいである。女史の功績に対して幾つかの女子大学などから名誉学位を贈られている。国際天文学連合では恒星スペクトル委員会の中の小委員会「変光星のスペクトル」の委員長を 1950 年代の終りに務めている。

女史は体も立派で、男まさりの精力的な活動家として戦前戦後の時期の女流天文学者の第一人者として活躍した。したがって私の知った中年のころはかなり勝気な人という印象を受けた。待遇のことなどで上層部に遠慮なくかみついたこともあり、まさに女丈夫であった。しかしあれわれのような若い者に対してはていねいであり、英國育ちのよさを思わせるところがあった。戦後かなり長く会っていなかったが、その後国際天文連合の総会などでときどき会うようになったときは、その昔の勝気さは消えて、円満な老婦人という感じになっていて少なからず驚いたほどである。

ガボシュキン夫妻には二男一女がある。円満な家庭の主婦としての役目も立派に果たした上でのような研究にうちこむことができたことはまさに驚きである。健康と頭脳に恵まれた女史にしてよくなし得たことと言える。生前のいろいろなことを思い出しながら、心からご冥福をお祈りしたい。

* Masaaki Furuhata